教師力講座
14

楽しい国語学習のスタートを

東京都港区立赤坂中学校教諭
甲斐（かい）利恵子（りえこ）

Q
今年度も、もうすぐ終わりですが、最初からやっておけばよかったと思うことがいくつかあります。
　次の四月に備えて準備をしたいので、早い段階でやっておいた方がいいということがあれば教えていただけますか。どんなことを大事にして、具体的にどんなことをやっていけばいいのでしょう。

A
　四月の子どもたちは本当に輝くばかりの表情をしています。大村はまさんは『教えるということ』（ちくま学芸文庫）の中で中学生たちを「身の程知らずに伸びたい人」と称しましたが、私も「やる気」が歩いているような人たちだなと思います。さすがに中学生ですから素直にその気持ちを出そうとしない人もいますが、本人の意思とは関係なく、「やる気」がこぼれ落ちています。実にほほえましい様子です。この「やる気」に満ちた人たちの「伸びたい」という気持ちを本当に大切にしたいと思います。

　「楽しい授業」は私たちの切なる願いですが、「楽しい」を間違うと途端に子どもたちの心は離れていきます。中学生たちの「楽しい」の中には、必ず「学びの実感」が必要です。
　今回は、中学校国語のスタートの授業を紹介したいと思います。

「学び」のための自己紹介

　記念すべき国語の授業の第一回目では、よく教師の自己紹介が行われます。私も若い頃はそれで一時間のほとんどを費やし、子どもたちを笑わせたりしながら国語の先生は楽しそうだと思わせたことに満足したりしたものでした。

　思い出すと恥ずかしくなります。国語の授業での自己紹介という意識が薄く、その場をしのぐことに必死だったことはわかりますが、これでは子どもたちはついてこないですね。また、ぶっつけ本番で子どもたちに自己紹介をさせてしまうのはもったいないことです。何の準備もないまま話をさせても魅力的な自己紹介はできません。

　私の自己紹介は後で行う「名前の本」という単元（漢和辞典の学習をかねて、自分の名前を調べ、ミニ本の作成とスピーチを行う単元です）を意識してやりました。一分スピーチをイメージしていたので、黒板に名前を書いて「一分で自己紹介をします」と言って始めました（内容は上記参照）。国語の授業では時間を決めて発表することがたくさんあるので、その第一歩を踏み出すための小さな学習です。教師の言動はすべて教材になるということを意識し、教室が「学び」の場所であることを実感させたいと思います。

◀私が行った自己紹介

　私の名前は甲斐といいます。アサリとかシジミの貝ではありませんよ。やり甲斐があるとか、やった甲斐があったねというときの甲斐です。
　利恵子という名前は自分では「利益に恵まれる子」という意味だと思っていました。あるとき母に尋ねてみたんです。
「利益に恵まれる子になって欲しいと思ってつけたんだよね。お金持ちになってほしいという意味でしょ？」と。そしたら母が言うんです。「確かにそうだけど、ちょっと違う。利益に恵まれる子にもなってほしいけど、できれば利益を恵む子になってほしい。この人に出会えてよかったと、周りの人に思ってもらえる人になれるといいね」と。
　みなさんが甲斐先生に出会えてよかったと思えるような授業をしたいと思っています。よろしくお願いします。

授業記録から

　今年度の中学一年生の授業記録を振り返ってみると、最初の数時間は次のような内容でした。

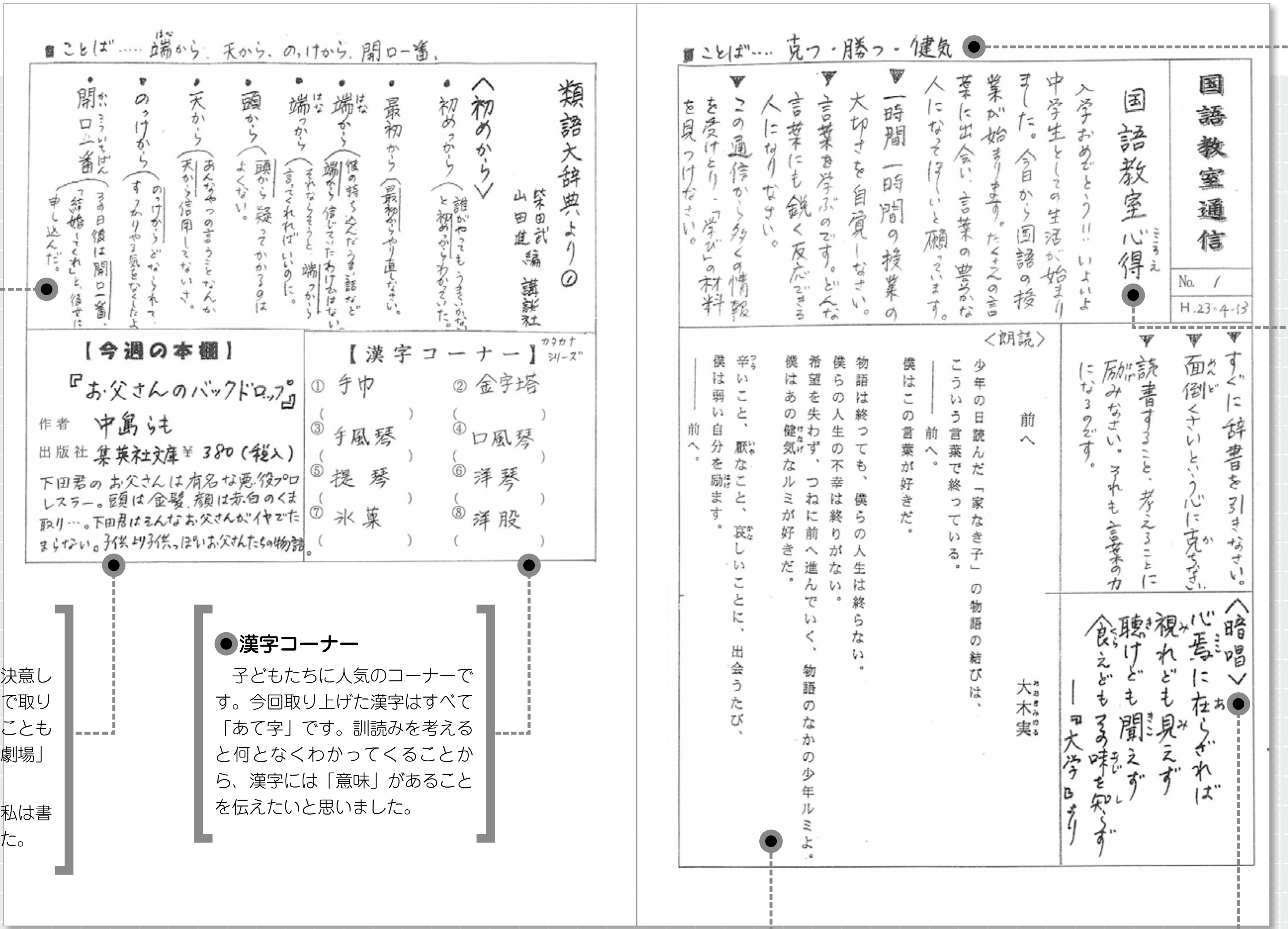
4/13　一、ノートの書き方（授業記録）
　　　二、「国語教室通信No.1」
4/14　一、「国語教室通信No.1」つづき
　　　二、副教材の配布
　　　　（自主学習のすすめ）
4/15　一、「国語教室通信No.1」最終回
　　　二、教科書を見る
　　　三、朗読をしよう
4/19　一、朗読劇場
　　　　『お父さんのバックドロップ』
　　　二、朗読をしよう
　　　　「朝のリレー」谷川俊太郎

　やはり、学習の第一歩として、ノートの書き方から始めました。学んだことを言葉にしていく作業が基本であることを教えたいと思うからです（ノート指導については「教師力講座4」二〇〇八年九月号を参照）。

　そして、第一時間目から「国語教室通信」というのがあります。これは、私が学習の見通しや言葉に関するコラムなどをまとめたプリントで、月に2回ほど作成し子どもたちに配布しているものです。いろいろな言語活動へつなげるための材料でもあります。「国語教室通信No.1」では、最初の時期にふれておきたい心得や活動など、これからの学習にとって大事だと思うことを盛り込みました（P22―23参照）。

　また、三時間目以降には「朗読」を設定しました。この時期に朗読の学習をすると「声を届ける」という意識ができ、一人ひとりが声を出すことで表現することの楽しさを味わえます。さらに、教室が明るく開かれた空間になり、声を聞く楽しさも味わうことができるのです。

「国語教室通信 No.1」の内容



ことば…… 克つ・勝つ・健気

国語教室通信

No. 1

H.23・4・13

国語教室心得（こころえ）

入学おめでとう!! いよいよ中学生としての生活が始まりました。今日から国語の授業が始まります。たくさんの言葉に出会い、言葉の豊かな人になってほしいと願っています。

▼一時間一時間の授業の大切さを自覚しなさい。

▼言葉を学ぶのです。どんな言葉にも鋭く反応できる人になりなさい。

▼この通信から多くの情報を受けとり、「学び」の材料を見つけなさい。

▼すぐに辞書を引きなさい。

▼面倒（めんど）くさいという心に克（か）ちなさい。

▼読書すること、考えることに励（はげ）みなさい。それも言葉の力になるのです。

〈暗唱〉

心（こころ）焉（ここ）に在（あ）らざれば
視（み）れども見（み）えず
聴（き）けども聞（きこ）えず
食（くら）えどもその味（あじ）を知（し）らず
―『大学』より

〈朗読〉

前へ　大木実（おおきみのる）

少年の日読んだ「家なき子」の物語の結びは、
こういう言葉で終っている。
――前へ。
僕はこの言葉が好きだ。

物語は終っても、僕らの人生は終らない。
僕らの人生の不幸は終りがない。
希望を失わず、つねに前へ進んでいく、物語のなかの少年ルミよ。
僕はあの健気（けなげ）なルミが好きだ。
辛（つら）いこと、厭（いや）なこと、哀（かな）しいことに、出会うたび、
僕は弱い自分を励（はげ）ます。
――前へ。

ことば…… 端（はな）から、天から、のっけから、開口一番、

類語大辞典より①

柴田武 山田進 編 講談社

〈初めから〉

・初めっから（誰がやってもうまくいかないと初めっからわかっていた。）

・最初から（最初からやり直しなさい。）

・端（はな）から（彼の持ち込んだうまい話など端から信じていたわけではない。）

・端（はな）っから（それならそうと端っから言ってくれればいいのに。）

・頭から（頭から疑ってかかるのはよくない。）

・天から（あんなやつの言うことなんか天から信用してないさ。）

・のっけから（のっけからどなられて、すっかりやる気をなくしたよ。）

・開口一番（かいこういちばん）（その日彼は開口一番、「結婚してくれ」と、彼女に申し込んだ。）

【今週の本棚】

『お父さんのバックドロップ』

作者　中島らも

出版社　集英社文庫 ¥380（税込）

下田君のお父さんは有名な悪役プロレスラー。頭は金髪、顔は赤白のくま取り…。下田君はそんなお父さんがイヤでたまらない。子供より子供っぽいお父さんたちの物語。

【漢字コーナー】 カタカナシリーズ

① 手巾（　　）
② 金字塔（　　）
③ 手風琴（　　）
④ 口風琴（　　）
⑤ 提琴（　　）
⑥ 洋琴（　　）
⑦ 氷菓（　　）
⑧ 洋股（　　）

●ことば

「言葉を学ぶ」教室であるということを自覚できるよう作っているコーナーです。ここに掲載されている言葉は，必ず辞書で引きます。

●国語教室の心得

国語の教室で心がけてほしいことをまとめました。

また，授業では「心得」という言葉をまず辞書で引きました。それから，辞書は早く引くこと，引いた後のメモの書き方を伝えました。

●暗唱（古語）

声を出すこと，暗唱の楽しさを知ること，古文に慣れることの学習です。

●詩の朗読

新学期，新しい気持ちになっている子どもにぴったりの詩だと思い，「前へ」（大木実）を紹介しました。

次の時間に，詩の朗読発表会を予定し，題名や作者の読み方・息の使い方・間のとり方・声の張りについて学習しました。

●類語大辞典より

言葉には広がりがあって、それを知ること、使うことは楽しいという実感をもたせたいと思って作ったコーナーです。

「類語大辞典」は、国語の授業でしばしば登場する魅力的な辞典です。子どもたちはこのコーナーが大好きです。

●今週の本棚

常に読書の話題をしようと決意して作ったコーナーです。ここで取り上げた作品を朗読してあげることもあります（私はそれを「朗読劇場」と呼んでいます）。

このコーナーのおかげで、私は書店に行くのが習慣になりました。

●漢字コーナー

子どもたちに人気のコーナーです。今回取り上げた漢字はすべて「あて字」です。訓読みを考えると何となくわかってくることから、漢字には「意味」があることを伝えたいと思いました。

言葉に出会うために

新版国語教科書には、一年のいちばん始めに「言葉に出会うために」という単元が設定されました。次のような項目があります。

- ■声を届ける
- ■書き留める
- ■本と出会う
- ■調べる
- ■言葉を読む
- ■いにしえの言葉に出会う
- ■言葉を知る
- ■言葉を楽しむ

中学生になってどんな勉強をするのか子どもたちはとても楽しみにしています。また、先輩になった二年生や三年生も新たな気持ちで頑張ろうとしています。新入生でなくとも国語学習の基本に立ち返るチャンスととらえて、これらの項目を学習に組み入れてみてはどうでしょうか。子どもたちの学びが実現するための第一歩が踏み出せたらいいですね。